

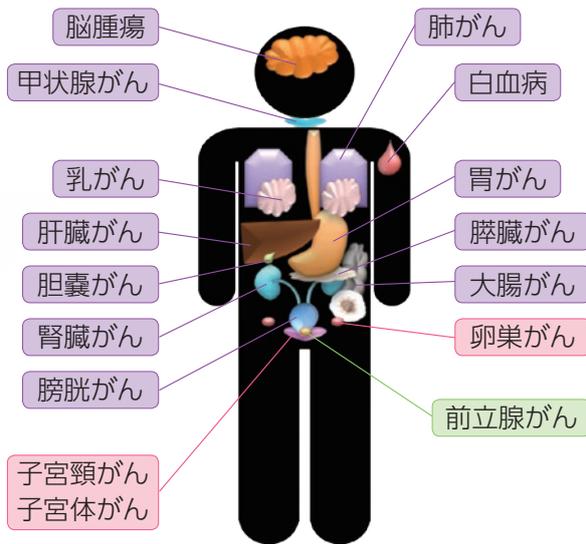
がん細胞はブレーキがきかない

がん細胞は、遺伝子に傷がついて分裂が止まらなくなった細胞です。がん細胞が増えて、体の正常な機能の邪魔をするようになると病気としてのがんになります。病気が進むと、体のほかの場所に広がって、命を失うこともあります。

がんは2人に1人がかかる病気で、誰もがかかる可能性があります。また、年齢が高くなるほどがんにかかる可能性が高くなります。

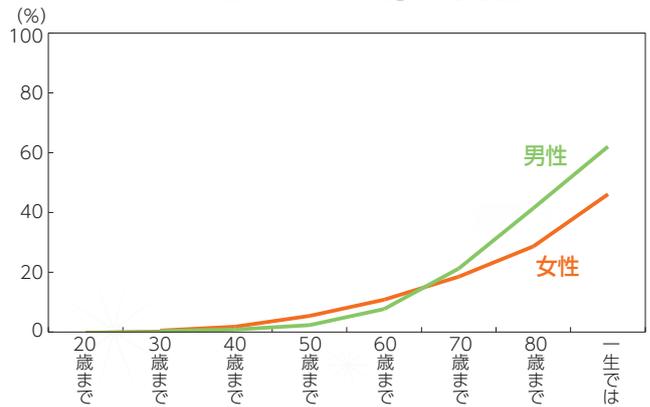


主ながんの種類



男性特有のがん 女性特有のがん

15歳の日本人が『がん』になる確率

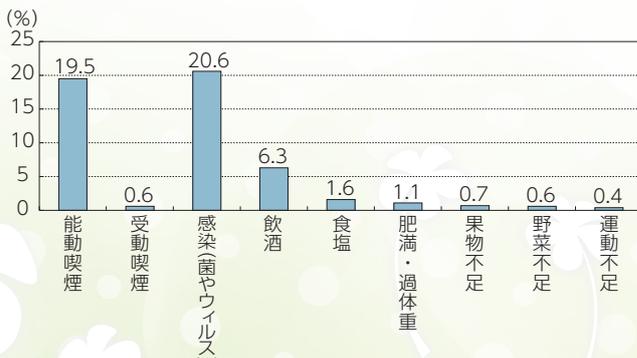


一生では
男性の63%、女性の47%
⇒ 2人に1人

出典：国立がん研究センターがん対策情報センター（2012年）

がんの発生の多くは生活習慣と感染に関係

がん発生に占める割合



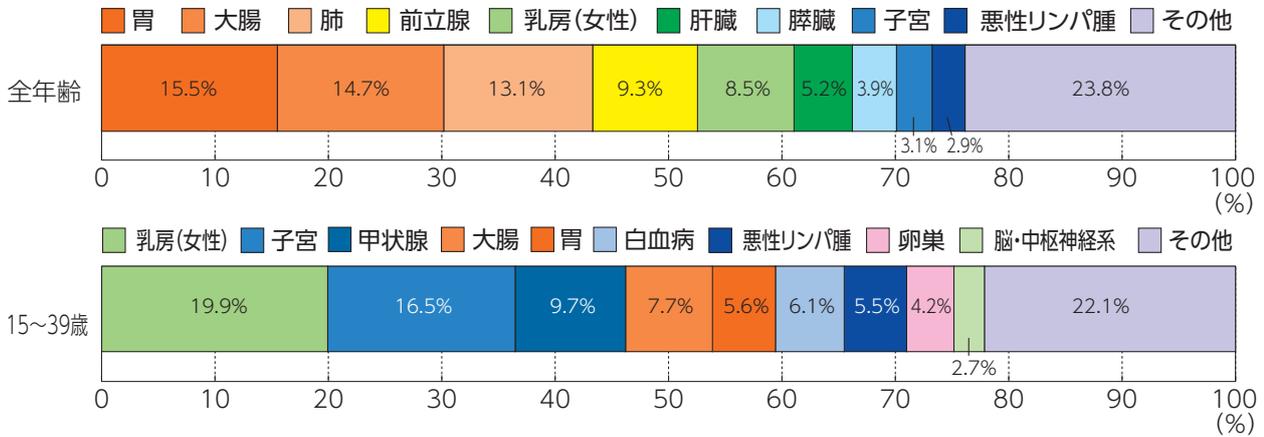
出典：国立がん研究センターがん予防・検診研究センター（2011年）

がんの発生の多くは普段の生活が関係しています。単一の原因としてはたばこがよく知られています。また、菌やウイルスの感染もがんの原因となります。たとえば、ピロリ菌は胃がん、肝炎ウイルスは肝臓がん、ヒトパピローマウイルスは子宮頸がんに関与することが知られています。ただし、がんという病気そのものは、人から人に感染するわけではありません。遺伝するがんもありますが、全体の5%程度といわれています。

若い世代のがんは、乳がんと子宮がんが多い

日本人の3大がんは、胃がん、大腸がん、肺がんです。これらのがんは、食事（減塩）、運動、禁煙などの生活習慣の改善である程度予防が可能です。一方で、15～39歳のがんでは、女性の乳がんと子宮がんが約4割を占めています。乳がんと子宮頸がんは、がん検診で死亡率を減らすことができます。その際、検診に行きやすくするなどパートナーの配慮も大切です。

がん発生率の内訳



出典:国立がん研究センターがん対策情報センター(2010年)

がん全体では早期のがんは9割治る

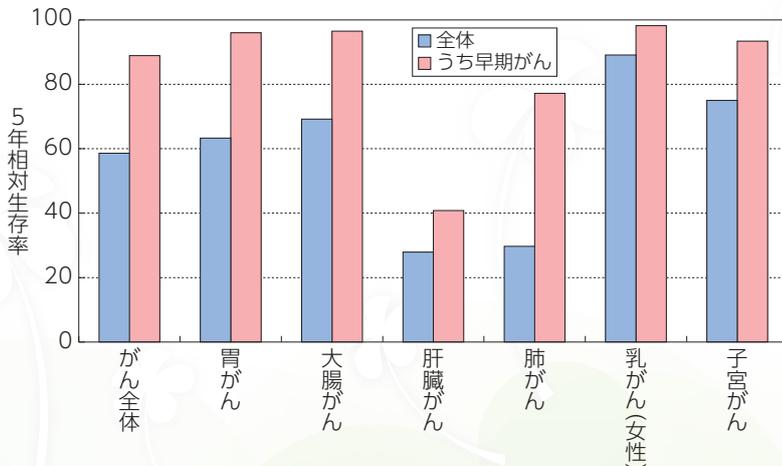
がんを早期発見する方法＝がん検診

がんは、早期であればあるほど治せる確率が高いのですが、体の中にがんができて最初のうちには自覚症状がないことがほとんどです。症状がなくても、がんを早期に発見し治療に結びつける契機になるのががん検診です。

がんの6割は治るといわれています。しかも、進行しないうち（早期）に見つかったがんは9割治ることがわかっています。「5年相対生存率」とは、あるがんと診断された場合に、治療でどれくらい生命を救えるかを示す指標です。

がんには色々な治療法があります。手術療法、放射線療法、化学療法などです。最近では、治療効果をよりあげるために、複数の治療法を組み合わせることも多くなっています（例：化学療法でがんを小さくしてから手術）。がんといってもいろいろ。もしがんにかかった場合には、主治医や医療関係者とよく話し合うことが重要です。

がんの5年相対生存率



出典:国立がん研究センターがん対策情報センター(2003-2005年診断例)

がん治療の三本柱



がん情報サービス国立がん研究センター

<http://ganjoho.jp/public/index.html>

検索